

「わたしたちの力の源」

ネヘミヤ書 第8章 9節～12節
コリント人への第二の手紙 第7章 8節～12節

説教 本庄侑子伝道師

失意の中にあっても、落胆や挫折が次々と押し寄せてもなお、決して挫けずに立ち上がり歩き続けることが私たちにできるのだとしたら、その力はどこから来るのでしょうか。

旧約聖書エズラ記とそれに続くネヘミヤ記は、捕囚から帰還したのちのイスラエルが国を再建する物語です。戦争に敗れ、繁栄を誇った王国が崩壊し、捕虜となって外国での奴隷生活を強いられた民たちは、赦されて祖国へ戻る事ができました。しかし、すべてが崩れ去った荒れ放題の地にあって再出発をするには、想像を絶するほどの課題が無限に横たわっていました。

エズラの活躍によって神殿が再建され、町も人が住める状態にまで回復したものの、外敵から都を守る城壁を持たないエルサレムは、度重なる攻撃を受けました。繰り返し襲ってくる意気消沈する出来事によって、人々は次第に気力を失っていきました。祖国への帰還が赦されたことで微かに立ち上がったように思えた神への信仰も消え失せていきます。やはり神は私たちをお見捨てになったのか…人々は疲れ果て立ち上がる意味を見失っていました。

しかし、神の御手は静かに動き続けていました。神はネヘミヤをお召しになることから始められました。ネヘミヤは祖国ユダヤからペルシャ王国に移されて、ペルシャ王の給仕をしていました。祖父の代からペルシャで安定した生活を送るネヘミヤにとって、エルサレムは愛すべき故郷というわけではありません。そんな彼が、同胞から祖国の惨状を聞いて、大きな悲しみに襲われたのです。ネヘミヤは座って泣き、数日の間嘆き悲しみ、断食して神の前に祈りました。

「まことにわたしもわたしの父の家も罪を犯しました。」この時ネヘミヤが流した涙は、祖国の惨状に胸を痛めての涙ではありませんでした。神の宮の荒廃に無関心であった自分とそれを見ておられた神、神の深い悲しみがネヘミヤに下ったのです。ネヘミヤの悲しみは神の悲しみ、ネヘミヤの流した涙は悔い改めの涙でした。

御霊に満たされたネヘミヤは、これまで自分たちがいかに神に背いて来たか、本当に憂うべき自分の罪の惨状を知り、懺悔の祈りを捧げたのでした。神はネヘミヤの心にまことの信仰を呼び覚まされたのです。

そんなネヘミヤの活躍によって、エルサレムの城壁や門が再建されました。また、帰還した民の名簿が整備され、管理する体制も整えられました。しかし、神の大事業はそれら外面的な再建を超えて、信仰の再建へと向かっていきます。あのネヘミヤに起こった出来事が、礼拝に集ったすべての民たちに起こるのです。その日、夜明けから正午まで立ったままで、ひたすら御言葉を聞き続けた聴衆全体から涙が溢れ出しました。それはかつてネヘミヤも流した涙です。罪を知った者の内から湧き出てくる涙でした。

しかし、城壁が再建され、秩序が整い、礼拝も確立された後、再び神の民たちは墮落していきます。ネヘミヤの成果は失われてしまいます。しかし、彼が挫けることはありませんでした。崩れたところからもう一度、信仰の再建のための働きを始めました。ネヘミヤは、自分の働きによる成果ではなく、どこまでも神への信仰によって生きるものとされていたからです。

教会の歩みは、そして私たちの信仰の歩みは、かつて今も変わらず、このようなネヘミヤ記の出来事を繰り返していると言えるかもしれません。私たちは礼拝において、聖霊を注がれ、御言葉を通して神の悲しみに深く触れることとなります。そして、神の霊の思いが呼び覚まされ、神の事業へと立ち上がらせられるのです。ところが、神に再建されてはまた、自ら崩壊させることを繰り返している。それにも関わらず、教会は立ち続けて来ました。私たちの罪の惨状にも関わらず、今もなお神の大事業がその完成に向かって進んでいるからです。

失意の中にあっても、なお私たちが立ち上がり歩き続けられるとしたら、その力の源は私たち自身にあるわけではありません。ただ主を喜ぶ信仰だけが、私たちを立ち上がらせ、神の事業に赴かせ続ける力の源です。

これからの私たちの歩みにもネヘミヤ記の出来事は起こり続けるでしょう。私たちの罪が、働きの実りや成果を無惨にも打ち砕くような出来事を起こし続けます。しかし、それでもなお、私たちは託された働きをやめなくて良いのです。主が再び来られる日まで、主が完成させて下さる神の事業、教会を立てる働きへと召され続けるのです。

(記 説教要約奉仕者)